



こそが「人づくり」につながると考えるからである。“作品づくり”にとどまらず“脳力”形成に貢献する森脇授業の文脈は「紙を破ったり、ちぎったりする感触の楽しさを味わいながら…」にもみえる。“五感覚総動員”の活動保証である。

### 3 “新3H（ほめる・はげます・ひろげる）美術教育” / “ドロシー\*3と想いは一つ子（個）の支援”の視点から

森脇教諭は、「指導観」に「自分の思いを進んで試している姿を認め、どの児童にも自分の考えを大切にしていって思いついたことをのびのびと試させたい。鑑賞の場面では、友達と作品を見合いながら表したかったことや表し方のよさや楽しさを感じ取らせたい。」と明記されている。この文脈は、子ども達同士の「ほめる・はげます・ひろげる」活動を誘発し“学び合う集団への進化”を予感させてくれる。いわゆるアクティブ・ラーニングの真骨頂ではないか。

### 4 “3M（みつめる・みまもる・みきわめる）美術教育” / “評価とは見極めてこそ子（個）にかえる”及び“教師道見極めることとみつけたり”の視点から

森脇教諭の学習指導案の「児童観」の記述に「アンケートでは、〈図画工作科は好きですか。〉という問いに対して、〈はい〉と答えた児童は27名、〈いいえ〉と答えた児童は7名であった。」と示されている。で、あれば、この7名の子ども達が笑顔になる「題材開発（たとえば〈教科書題材〉に手を加え内容・方法の工夫・改善等）」に取り組めば、きっと34名全員の笑顔をみることができるとはしないか。このことも先の私の提案、「絵」のみでなく「絵や立体」にひろげることと無縁ではない。

### 5 “造形環境” / “支援とは心にかけても手はかけぬ”の視点から

森脇教諭は、活動のための「材料」として、ただの「新聞紙」ではなく、「英字新聞」を準備なされた。意味の深い配慮である。また、「色画用紙」、「赤」「青」「黄」「緑」が準備されていた。その「適否」は「議論」になるところかもしれない。

### 6 “もまた魂” / “肯定も否定もまたね視野に入れ”及び“めだかもねすずめもまたね是々非々で”の視点から

森脇教諭は、「題材について」で、「絵をかくことが苦手」、「何をかいたらいいか思いつかない」、「発想が広がらず、どう表現するとよいか悩む児童が数名みられた。」等の実態を明記されている。「題材名」の「やぶいた かたちから うまれたよ」の文脈で生まれてくるのは「宇宙人」「おばけ」「とてもこわいこわい生き物」等々であってもよい。これもやはり「絵や立体」との設定であれば、あるいは、7名を含め、子ども達自身が、みずから「ひろげたり」、「さまざまな表現法（どう表現）」等々、未知をつくりだしたかもしれない。なぜなら、ちぎれた一枚の新聞紙を「パンツ」と叫んだ子、それを支持的に受け止める仲間や森脇教諭が共存する支持的風土の漂う学級だったからである。

## おわりに

「想像力」は、平和な世界をつくる原動力との信念を基盤に美術教育に取り組むウカシェビッチ先生（ポーランド）の姿をドキュメンタリー「想像力はもうひとつの手 / 1993年3月18日\*4」にて視聴。琴線にふれいまでも心に残っている。今回、森脇教諭の授業と出会うことで“想像力”や“人間力”形成の“ツール”としての美術教育を再考する機会を得ることとなった。感謝至極！

\*1 スタンダード（図-1）の詳細は、拙著“五七五 de 美術教育”参照

\*2 森脇知子教諭のアンケート「図画工作は好きですか」について「いいえ」と回答した子ども達

\*3 「子は親の鏡 / ドロシー・ロー・ノルト / 子どもが育つ魔法の言葉」PHP 研究所、2000年

\*4 拙著“五七五 de 美術教育” pp25-26